



# ビジネス基礎の指導上のポイントと留意点

## ～希少性，トレード・オフ，機会費用について～

名古屋市立西陵高等学校教諭 三輪 俊輔

ビジネス基礎は、旧学習指導要領から取り入れられた科目ですが、現行の学習指導要領において新たな内容が加わりました。本稿では、そのうちのひとつである経済活動に関する基礎的な内容を、「希少性」、「トレード・オフ」、「機会費用」という3つのキーワードから指導していく方法について取り上げたいと思います。

### Q1 学習指導要領での位置づけはどのようなのか？

平成25年度から実施されている現行の学習指導要領では、内容の範囲や程度として「土地、資本、労働力といった生産要素の希少性、経済主体、経済活動の循環など経済活動の基礎的な内容を扱うこと」とあり、本稿で取り上げる3つのキーワードのうち明確に示されているのは、実は「希少性」だけなのです。

しかしながら、同解説には、「土地、資本、労働力といった生産要素の希少性、経済主体の役割、トレード・オフと機会費用（中略）について理解させる」とあることからわかるように、この3つのキーワードは相互に関連しているものであり、そのつながりと全体像を生徒に指導することが求められていると考えられます。

また、現行の学習指導要領においては、経済学の基礎的な知識を学習するための新科目「ビジネス経済」が規定されました。カリキュラム上、設定している学校・学科はあまり多くはないようですが、履修する生徒には、この3つのキーワードは、ビジネス経済につながる内容として、ぜひ押さえておいてほしい内容です。一方、ビジネス経済を履修する機会のない生徒には、経済学的な考え方に触れる唯一の機会になるかもしれません。

### Q2 経済学的な位置づけはどのようなのか？

この3つのキーワードは、ミクロ経済学の基礎的な概念として用いられます。マンキューは「経済学とは、社会がその希少な資源をいかに管理するかを研究する学問である」とし、経済学の十大原理における第1原理「人々はトレードオフ（相反する関係）に直面している」、第2原理「あるものの費用は、それを得るために放棄したものの価値である」としてこの3つのキーワードを取り上げています。すなわち、ビジネス基礎においては、希少性という問題に対して、個々人の意思決定をどのようにすべきかという点から経済学的なアプローチを試みているということがいえるのではないのでしょうか。

### Q3 指導の流れは、どう考えられるか？

3つのキーワードは、次のような流れで指導することにより、生徒にとって理解がしやすくなると思われます。

① そもそも資源には限りがある（希少性）



② すべてを手に入れることはできないので、選択をしなければならない（トレード・オフ）



③ 選択の際の基準となるのが、選ばなかったものから得られたであろう利益（機会費用）である

経済を学ぶ上では、抽象的な概念を理解することが最終的には必要になると思われます。しかし、生徒にとっては、概念よりも具体的な例示をするほうが容易に理解できることは言うまでもありません。このビジネス基礎は多くの学校において、1年生で履修することから考慮しても、まずは「わかりやすさ」、すなわち、正確性を若干犠牲にしても、身近な例を使いながら指導することを念頭に置くことではないのでしょうか。

#### Q 4 「希少性」の取り扱い方は？

教科書 34 ページにおいて、希少性が取り上げられていますが、ここでは特に、生産要素が希少であるという記述になっています。前ページにおいて生産要素が取り上げられていますので、その流れによるものだと思います。これを「資源には限りがある」という形に持っていくと簡潔になります。

地球上の資源には限りがあることを、たとえば農作物の生産を例に考えさせてみるのはどうでしょうか。生産要素のひとつである「土地」だけを挙げて、次のような説明ができます。

「お米を作るには土地が必要ですね。しかし、地球の大きさは決まっているので、土地も無限の広さがあるわけではないです。ということは、そこから作られるお米の量にも限度があるということです」

このような説明が、あらゆる商品についても同様に言えることを生徒に理解させたいところです。そうすれば、「わたしたちが手に入れられるもの」も有限であること、すなわち希少性はすべてのものに対して言えることだと気付かせることができます。

同ページの囲みに、「希少性と価格—水とダイヤモンド」という文章が掲載されています。経済学において「経済財」と「自由財」について議論されることがあります。そのうち「自由財」には、需要より供給がはるかに上回っており希少性がないもの、具体的には空気や海水などが含まれます。これらには通常、価格はありません。しかし、空気もたとえば海中では希少性をもちます。それゆえに、スキューバダイビングなどを楽しむ時には、空気を購入することになるのです。すなわち、価格がつくものには希少性があると理解させることもできるでしょう。

また、生産要素には直接的には含まれませんが、生命にも限りがあることから「時間」にも希少性があるということに気付かせたいところです。

#### Q 5 「トレード・オフ」の取り扱い方は？

まず、Q 4 でみてきたような、希少性の話題から、「欲するすべてのものを手に入れることはできない」という点を認識させるとよいのではないかと思います。そして、「すべてのものを手に入れられないからこそ、どれを手に入れて、どれをあきらめるかを選ぶことが必要になる」という展開にしていけるのはいかがでしょうか。

「資源が有限である以上、生産されるものの量にも限りがあることはわかったでしょうか。たとえば、限られた広さの土地で、お米を作るのか、野菜を作るのかということも、生産者は考えないといけません」

教科書 35 ページの説明では、ビジネスにおけるトレード・オフを中心に据えています。授業ではこれに加えて、個人としてのトレード・オフが存在することも意識させたいところです。よく見られる例としては、「高校を卒業した後、就職すべきか進学すべきか」というものがあります。そして、この選択に対して、合理的に選択し、行動するための基準として、機会費用の考え方があることを確認しておく、次の話題につながりやすいと思われます。

#### Q 6 「機会費用」の取り扱い方は？

機会費用について指導する際には、「会計上の費用」と「見えない費用」との違いを理解させたいところです。機会費用は、この2つの費用の合計であるからです。

「ここから駅まで行くのに、タクシーだと1,000円かかるけど、待ち時間なしですぐに行けます。バスだと200円で行けるけど、1時間待たなければいけません。このとき、タクシーを選ぶ人はどんな人でしょうか？」

「会計上の費用」では、1,000円より200円のほうが安いので、バスを選ぶほうが良いのは明白です。しかし、直接支払うわけではない費用、つまり「見えない費用」を考えると、たとえば、待っている1時間の間にアルバイトで収入をより多く得られる場合などは、機会費用はタクシー代よりも高くなり、タクシーを選ぶほうがより合理的な選択となります。

#### Q 7 全体的に注意すべき点は何か？

本稿で取り上げた3つのキーワードは、ビジネス基礎のごく一部の範囲にすぎません。それゆえ、この部分にかけられる授業時間は、せいぜい1～2時間程度だと思われます。しかしながら、生徒には、これらを単に用語として覚えさせるだけではなく、その本質を理解させたい重要な箇所だと考えられます。

わたしたちの日常生活と経済的な考え方がつながっていると気付かせることで、多くの生徒にとって、とく難しいと敬遠されがちな経済学への新たな側面を提示することができれば、この部分の目標は達成されたといえるのではないのでしょうか。